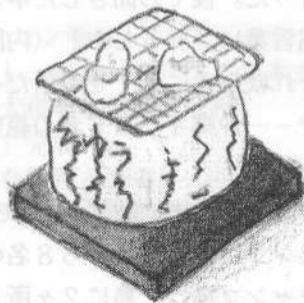


# あぶら通信

第30号 2008年12月 あぶらむの会発行  
〒509-4121 岐阜県高山市国府町宇津江3225-1  
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494  
E-mail: abram@hidatakayama.ne.jp  
URL <http://www.kokkufu.net/~abram/>



土人形 小坊主さんの楽しみ

# 飛騨俵り

地球の自転のスピードは、昔も今も変わらないはずなのに、年齢と共に一年の経つのが本当に早くなりました。これを「トイレット・ペーパー理論」とはよく言ったものです。初雪にしてはけっこうな積雪に越冬準備を急ぐようにとせつつかれ、つい先日書いたはずなのに再びめぐってきたあぶらむ通信の原稿書きそのメ切日にせつつかれ、おまけに年の瀬。バタバタ状態の中からお便りさせていただき失礼お赦し下さい。

通信をお手にされている皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。本年もあぶらむの会に多大なご支援をお寄せ下さり、心よりお礼申し上げます。

## ●あぶらむキャンプと子どもたち

あぶらむを助けてくれていた若手スタッフの転進で、一挙に平均年齢のあがったあぶらむスタッフ、でもやらなければならない仕事は待ったなし。老骨(?)にムチ打ちながらもこの一年、春夏冬の子ども達相手の野外プログラムも頑張りました。

11年間続いたネパールの旅、お休みの本年、そのかわりにと永年の課題だった「沖縄キャンプ」を実現することができました。子ども達と「与えられた自分の人生を生きる」ということを考える時、私のホームグラウンドである「ハンセン病療養所 沖縄愛楽園」へ彼らを連れて行きたかったのですが、高齢化した入園者の皆さんの現実を考えるとそれは無理。私の能力を越えることは承知しつつも、沖縄の自然と、60余年前の「沖縄戦」から学ぼうと企画しました。

ご承知のように沖縄戦では「集団自決」という悲惨な出来事がありました。1945年3月26日、絶大な戦力を誇った米軍は沖縄本島上陸作戦にともない、その前進基地を確保すべく、本島西方海上40kmにある慶良間諸島の座間味島、渡嘉敷島に上陸を敢行した。小さな島々、逃げ場を失った島民は島の中央部に追い込まれ、そこでは軍より支給された手榴弾に家族が群がり、死にきれなかった者をナタヤカマで殺すなどという出来事が起こったのです。座間味島358人、渡嘉敷島329人が犠牲となった。

22年前(1986年)、私は関西学院大学宗教部の依頼で、沖縄での研修会を企画することとなった。沖縄を語る時は沖縄戦を抜きには語れず、沖縄戦を語る時は、座間味、渡嘉敷島の島民集団自決を抜きには語れない。

当時、沖縄キリスト教短大教授の金城重明氏がその集団自決の生き残り、生き証人とお聞きし、私は図々しくも講演のお願いに行った。後でお聞きした事だが、人前でこの事を話したのが初めてだということでした。沖縄言葉に「肝苦しや」(内臓の痛み、それほど苦しいおもい)という表現があるが、それはそれは筆舌に尽くせぬ話だった。(詳しくは金城重明先生の近著、「集団自決」を心に刻んで—沖縄キリスト者の絶望からの精神史—高文研出版)

私はあぶらむ沖縄キャンプのキャンプ地を、「国立沖縄青少年交流の家」のある渡嘉敷島に決めた。はじめてのあぶらむ沖縄キャンプ、地元沖縄から8名の参加者を得、総勢29名の大所帯となった。沖縄青年交流の家のキャンプ場は、島に2ヶ所しかないビーチ(砂浜)の一つ、渡嘉敷志久ビーチに設けられている。小学生15名、中学生4名、大人10名の陣容で全行程のテント泊生活は多くの困難が予想された。どの子も4泊5日のテント泊生活は初めて

だった。この「子どもたちに戦争体験をどう伝えるか」、これは大きな難問である。（こんな事を「戦後生まれ」の私が云うのだからおかしな話ですね。）一つの出来事や光景を相手に伝えるということは、「想像力」をもってしかできない事と私は思う。重い病気や悲惨な出来事に直面した人の心中、当事者でない者は、その人の苦痛や苦悩は、自分の想像力（共感力）の範囲内でしか理解できないと思う。特に子どもたちには、この「痛み、苦悩への共感」という「想像力」を豊かにすることが大切と思う。これは家庭裁判所から補導委託というかたちで少年を預かって共に生活している私の最近の実感である。

私たちのキャンプ場、渡嘉志久ビーチから集団自決の場所まで片道8km、私は全員で歩くことにした。沖縄の美ら海を満喫していた子どもたちは、60余年前、この島で集団自決という悲惨な出来事があったなどとは知るよしもなかった。

阿波連ビーチと我々のキャンプ地渡嘉志久ビーチ以外、断崖絶壁の自然条件厳しい渡嘉敷島。徒歩移動出発前夜、初めて子どもたちに「島民集団自決」の話をした。60余年前当日は雨、その雨の中を島民は追われ、現在も「ハブ多発、注意」のある山中を逃げまわり、島中央部山頂に追いつめられ、集団自決に至った事を話した。

キャンプ地から山頂部まで片道8km、往復16kmの徒歩移動は、小学生には少々きつかったと思うが、全員よく歩いた。島山頂部の「集団自決地」に着いた時は、疲れもあったろうが子どもたちの口数は少なかった。お世話係で参加してくれた川上美砂さんが、記念碑に刻まれている碑文を精一杯のおもいをもって読んでくれた。水を打ったような静かさ、涙ぐんでいる子もいた。刻まれた一つ一つの言葉が、子どもたちの心の中にしっかりと入り込んでいく様が手にとるように伝わってきた。「1才児〇名、3歳児〇名、…」と年齢別犠牲者を刻んだ碑を見つめ、自分と同年齢のところで指を止め、涙ぐんでいる子もいた。胸が一杯になった。8km余の道をこの地点まで歩いてくる中で、一人一人の中にあの日の出来事が「想像」されていったのだと思う。これが車か何かできて、「ここが集団自決の地です」と説明されても、果たしてどこまでの深さをもって心の中に届くのかと思った。

私たちがこの島に着いた日、その日はくしくも「この島民集団自決に軍の関与があった」と東京地裁から判決の下りた日だった。



渡嘉敷島、島中央部山頂に立つ島民集団自決の碑

## ●ひろし少年と家裁少年

50数年経った今も私には忘れられない事がある。その時の自分の心の動きの細部を、今もはっきりとおぼえている。姉と二人で伯母の家を訪ねた時だった。数日滞在したある日、突然大人全員の顔が険しくなっていた。正座するよう命ぜられ、落書きされやぶられた一枚の写真を見せられた。その家の大切な記念写真だったらしい。なぜこんなことをしたのかと厳しく詰問された。私はあまりにも突然なことで、また、全く身におぼえない事だったので、何が何だかわからなかった。しかし、その家では子どもは私一人、そんなことをしでか

すのは私しか考えられない状況だった。子ども心にもあんな絶体絶命、逃げ場のない気持ちは初めてだった。どれだけ私がやっていないと試してみても、他は大人ばかり、そんなバカげた事をする者はひろし少年以外ありようがない状況設定なのです。どれだけ自分ではないとさげんでみたか、しかしその後、あまりもの絶望感から、こうなったら大暴れするしかないと自暴自棄になり、私はありったけの力をもって一世一代の大暴れをしました。そしてそのことにより、犯人は私でありますと、周囲の大人達には受けとめられてしまったのです。後で冷静になって考えてみれば、その時そこにもう一人の子どもがいたのです。指圧の仕事をしていた伯母のところへお客が来ていて、その人が私と同じ年齢の子を連れてきていたのです。それは後の後になって気づいた事、私が執念深く犯人探しをするほど、その出来事はひろし少年の心を深く傷つけたのです。

私が50数年前の出来事を書いたのは、あぶらむの里で共に生活をする、家庭裁判所の補導委託によって送られてくる少年達（以後、家裁少年）の生いたちを聞くと、あの時のひろし少年の気持ちと何か相通じるようなものを感じるからです。両親の離婚による心の痛手や親による虐待、周囲の大人、特に学校の教師や施設の職員などの指導的立場にある大人からの「決めつけ」や色メガネ（偏見）等によって深く心が傷つけられ、親や大人など信じられなくなり、どこにも希望を見いだせず自暴自棄になっている姿を見るのです。少なくとも「決めつけ」というものを脇に置き、今一度サラな気持ちで少年達に接すると、そこにはお互いこれまでと異なった展開が生まれてくるのです。しかし、この「決めつけをはずし、サラな心で見ると」ということが、私たち大人と呼ばれる存在には中々できないのですね。簡単なようで一番難しい事かもしれません。お互い、もう一度、サン・ティグジュベリの「星の王子さま」を読みなおしましょう。

私たち大人が、次代を背負うべき子どもたちに、どのような「後姿」を見せられるのか、家裁少年を通して問われているのは、私たち大人とよばれている存在だと思知らされる今日このごろです。

### ●「ジジと孫」一家裁少年7人目の旅立ちー

4年前、当時神戸家庭裁判所の調査官だった辻村さんから打診され、少年補導委託の仕事を引き受けてから、この秋で7人目の少年を無事に送り出した。「いつもカリカリしていて気短なあなたに、そんな仕事できるの。自分とよく相談して決めなさい」と女房にいわれた私、その割にはよく7人も無事に送り出したものと、我ながら感心している。家裁の調査官が云うには、「けっこう逃亡が多いのですよ」とのこと。我が身に置きかえてみれば、「補導委託先」から逃げ出す気持ちもわからなくはない。あぶらむの里のようなこんな山の中で、この世の香のする町まで7km余、TVなど娯楽らしきものもない環境で、「ジジと孫」ほど年齢差のある私たち夫婦と一緒に生活する、逃げ出さない方が不思議な位である。なのにこれまで誰一人として逃げ出す事もなく、裁判官から課せられた6ヶ月余のここでの生活を全うしてくれた。家裁少年と呼ばれる彼等7人に、私たちが配慮されての事だろうと思っている。

最近やってきたB少年、お母さんの年齢が36歳、私の長男と大差ない。我が家の子ども達も昨年二人も結婚し、私たちも人並みに「ジジ・ババ」となった。考えてみれば現在一緒に

生活している少年も、私たちの「孫」であっても不思議ではない年齢関係。まさしく「ジジ孫」関係なのである。この事実に気づいて少々愕然、私個人としては高齢化問題は他人事と  
思っていたのですが、客観的にはいつしかこのあぶらむにも高齢化現象が派生していたので  
す。確かに一昨年前までは若手のスタッフがいて、家裁少年達のお兄さん役、親役を担って  
くれていたのです。なのに急に「ジジ孫」関係までジャンプ・アップ（ダウン？）してしま  
っていたのです。このように考えてみますと、私自身としては未だ若く、気力もあると思っ  
ていますが、生活を共にする家裁少年から「ジジ孫」関係をつきつけられると、後継者を含  
め、今後のあぶらむの会を真剣に考えざるを得ない状況設定となってきました。「年齢相  
応に」という言葉を実感させられている今日このごろです。

11月19日、初雪が降りました。初雪の割には積雪が多くありました。温暖化とはいわれ  
ながらも、飛騨地は暦通りに冬がめぐってきました。どうぞご自愛下さいませ。  
新しき年、幸多からんこととお祈りいたします。どうぞよいクリスマスを、そしてよい新  
年をお迎え下さい。

2008年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

## 「沖縄渡嘉敷キャンプ、行ってきました！」

川上 美砂

白い砂浜と珊瑚礁の広がる青い海で子どもたちを思いっきり楽しませてあげたい、私も仕  
事から解放されて人魚の気分を味わいたい…と行ってきました、渡嘉敷島キャンプ、3月27  
日から全1週間。なか4泊5日は海に面したキャンプ場での生活。総勢29名、小中学生を中  
心に沖縄、名古屋、岐阜、新潟、東京から参加しました。1ヵ月半ほど前に、豪雪のあぶら  
むで、雪遊びを楽しんだ子どもたちもいて、今度は沖縄の南の島で海遊び！というのが、な  
んともダイナミックなものでした。

渡嘉敷島に到着した日、暖かな日差しに胸が躍ります。テントを設営し、ちょっぴり寒か  
ったけど海にも入りました。大型カヌーに乗り全員で海へ。翌朝からは、探検と海岸清掃を  
兼ねた散歩でスタート。あいにく2日目夕方から天気は下り坂、大雨強風警報が出ていたと  
か。女の子組は避難所を兼ねたバンガローに移動。男の子たちはテント泊、9歳の息子は  
「すごい風と雨の音で眠れなかった～」と、忘れられない夜になったようです。

翌日は、シーカヤックという二人乗りの船に乗って海にこぎ出しました。全員がカヤック  
に乗り込み、13艘が次々青い海に放たれていく光景は見応えがありました。一本のオールと  
同乗者だけが頼り、どの子も真剣、一生懸命に声をかけ合っていました。が、1艘だけ、ス  
イスイと先頭に躍り出る船が…大郷先生でした。飛騨の山ですっかり腕が鈍っているのでは  
との予測を裏切る、見事な快走。かつて沖縄サバニレースにも出場しただけあってさすがで  
した。先生とこいでいたお母さんは、「海には波のリズムと風のリズムがあって、その両方  
を感じながら、こぐんだね」と、うれしそうに話してくれました。

やがて、子どもたちの船は合図を受けて、ささ〜っと海岸に帰着し始めました。気がつけば私たちの船だけが沖合に…。じゃ戻りましょうとオールをこぐのですが、あさっての方向にどんどん流されて行くではありませんか。風も強くなり、まずい、と焦っていたところに水上バイクでスタッフさんが来てくれて、「右をこいで、右！」と教えてもらい、必死でこぎまくって、海岸に戻ることができました。進む方向を変えるときは風に背を向けなくて、風に向かって方向転換するんだと改めて教えてもらいました。おばちゃん号は、糸の切れた凧に見えたようで、「みさママ、どんどん遠くに行っちゃって心配したよ〜」と温かい言葉をもらいました。もしかして人生も困難に背を向けたら、たちまち流されてしまうっていう教訓？なんてことは、後になって思ったことで、この時はただただ風に押し流されていく怖さを実感したのです。

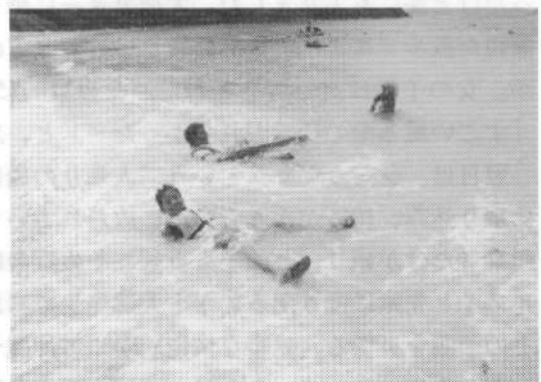
砂浜では、サンドアートにも挑戦しました。お城やケーキ、スフィンクスが登場する遺跡までできました。砂は粒子が細かく、触っているだけで気持ちよくて、お砂糖やきなこみたいななんて表現していた子もいました。海岸いっぱい作品は、壊してしまうのがほんとうに惜しく感じられました。それにしても、ただ砂浜にいるだけなのに、子どもっていつまでも全然飽きないんですね。

ほかに、アダンの葉っぱを乾燥したものでクラフトをしたり、庭にある木にどれだけぶら下がってられるかとみんなで挑戦したり、沖縄の歌でいんさぐぬ花を沖縄の子ども達のリードで歌ったり、つかまえたやどかりをのぞき込んだり、だれかのひょうきんな振る舞いにみんなで笑い転げたり、海での生活はあつという間に過ぎていきました。

そして、このキャンプには、もう一つ大きなプログラムがありました。63年前、このキャンプ場のある前島に米軍が上陸し、島民が日本軍に集まるように言われて歩いた道、集団自決のあった場所までの往復16Kを歩き通したのです。当時は樹木の間を縫って、赤ん坊を背負い、お年寄りに手を貸しながら、歩き続けていったのでしょうけれど。

たどり着いた現場は、音もなく静かでした。うっそうとした森のなかで、その場所は窪んで水が湧き出ていました。ここで、いよいよ気持ちを決めて肩を寄せ合ったのでしょう。わずかな手榴弾でも爆発の効果がより得られるようにと、この窪みを選んだのだろうと大郷先生が話していました。死にきれなかったわが子をナタで叩き、汚れた布を布団のようにかけたあと、木にひもをかけて首を吊った母親の話が慰霊碑に書かれていました。

今、子どもたちがあどけない顔で同じ窪みに立っている光景に胸がつまりました。どうしてこの子たちを殺すことができるだろう、どんなことがあっても二度とそのようなことをしてはいけない、平和を守らなくてはならないと、身体中でつよく感じました。子どもたちも、静かでした。宮城良子さんは「苦しさ、毎年夏になると思い出してつらいさ」と言葉すくなくて。数日後、東京地裁で判決が出たと、大郷先生から聞きました。集団自決に日本軍関与の事実があったと…。



国立沖縄青少年交流の家キャンプ場のビーチ。  
海はどこまでもブルー。

食事づくりは薪でした。良子料理長のもと、私たちママ連もがんばりました。良子さんは口癖のように「なんともないさ～、良子は喜んでやるさ～」と言い、いつも笑顔で働きづめでした。何か足りなくても、さっとほかのことで間に合わせる、まさに知恵の固まりでした。8歳で終戦、14歳まで裸足だったという足の裏はつるつるでなめらかに引き締まっています。私たちは、パワフルで温かい沖縄女性の良子さんの魅力にすっかり引きつけられ、自分を振り返り、少しでも近づきたいと思ったのでした。しかも、夜にはおしゃべりに花が咲いて、持って行ったオリオンビールもすぐに空になっちゃいましたもんね！

子ども達、キャンプでの楽しくも不自由な生活で、お互いに手を貸し合う姿もたくさん見られました。ゲームやテレビでは決して味わえない楽しさや厳しさを味わったことでしょう。でも、自分のことは自分でという年齢相応の生活力、偏食や食べ方といった食生活、荷物やお金や時間の管理、自分はよくても他の人にとってはどうか考える社会性…相手に気持ちを伝える力の弱さなど、子どもたちがこんなにも育ちそびれている！と感じました。親として、おとなとしてどう思う？と事実を突きつけられたようでした。しかし、思い切って便利さからも、親元からも離れ、自然と仲間を感じることで、子どもたちが少しずつ変わっていく姿を垣間見たとき、日常とは異なるステージに身を置くことで、子ども自身が自分を再生させていく、このキャンプのようなプログラムが必要だとつくづく感じました。私たち親もわが子ができているかいないかの視野ではなく、子どもたちに何が必要かを真剣に探らなければならない、そしておとな自身も生きていく上で何が大事なのかを、見つめ直さなくてはならないと思いました。

そして、沖縄との出会いから長い年月を経て、この海で沖縄と本土の子どもたちとのプログラムを実現した大郷先生の深い思い…、青少年自然の家の方、宮城正子さんなど、多くの方の思いと努力があってこのキャンプが生み出されたことに心から感謝します。

キャンプを終えるときには、どの子も可愛くて、連れて帰りたくなりました。最終日に、良子さんとホテルでシャワーを浴びてビールで乾杯したときには、思わず胸がいっぱいになって、涙がこぼれました。そして、キャンプから帰った日に、ある男の子が涙を浮かべながら、ご両親にこう言っていたそうです。「ぼくはこのキャンプで、いろんな気持ちになったよ。うれしかったり、楽しかったり、悔しかったり、こわかったりしたよ。でもまた行きたい！」と。海のきれいさや自然のきびしさ、そこで生活する大変さ、歴史の事実のこわさ、ご飯のありがたさ、人と一緒にいることの楽しさ…、ひと言なんかじゃ言えない、きっといろんな気持ちを味わったん



だよ。そういう心を震わせる体験が子どもの心と身体にしみ透っていったとき、きっと生きていく力がひとつ溜まっていくんじゃないかと思うのです。楽しいことばかりじゃないけれど、生きていくことはやってみるに値する！と子ども達は感じてくれたんじゃないかと思うのです。…私自身が、そうでした。

もし、また渡嘉敷島に行くことができたなら、あの砂浜で真っ白な珊瑚礁のかけらを積み上げて、真ん中にろうそくを灯し、おとなたちで時間を忘れて飲みたいなあと思っています。沖縄キャンプを振り返って…参加した二人の息子に聞いてみました！

### ●一番印象に残ったのは？

小4弟：きれいな海!! 何百M先も見えそうなくらい透明な海、サンゴの落ちている砂浜！  
もっと魚とか見たかったな～。

中3兄：集団自決の現場に行ったこと…歩いているうちから、どんな気持ちだったんだろうとか考えてた。着いて、ああここなんだ、ここで死ぬっていう気持ちってどんなだったんだろう、自分には何万分のいくらいしかわからないんだろうと思った。

### ●海遊びはどうだった？

弟：楽しかった、でもこわかったよ。お母さん、流されてマジで死ぬかと思ったよ。

兄：風が強かったりしたからな、だけど楽しかったよ。砂浜でサンドアートしたのは、久しぶりに子ども時代に還りました(笑)…その晩の嵐で次の日に半分になっていてビビったけど。あと魚釣りとかできたら最高だったけどな～。

弟：おれも～。(母：それはやっちゃいけないんだよね～残念だけど。)

### ●テント生活は？

弟：嵐の夜はほんとすごかったよ。全然眠れなくてさ。でも最後のほうでテントでみんなでおしゃべりしたりして楽しかったな～。

兄：テントは良かったよ。雨漏りとかしたけど、ワクワクしたし、面白い話とかしてさ。大郷先生がアラスカに行って、外でオシッコしようとしてビニール袋にしたら、穴が空いててとか…みんなで盛り上がったよ～。

### ●ご飯はどうだった？

兄：すっごくおいしかった。特に最後の炊き込みご飯！(母：あれは最後に薪がなくなつて苦労したんだよ～)

弟：お汁とか、あったかくておいしかったよ。お代わりもしたし。

### ●ゲームもないし、不便だったかな？

弟：楽しいこといっぱいあったから平気だったよ！

兄：覚悟して行ったから平気。それにネパールに比べたら、全然だよ～(笑)

### ●もっとうざかったら良かったって、ある？

兄・弟：やっぱりお天気ももっと良かったらな～。もっとうざかったよな～。



## 「あぶらむの里で」

立教小学校 5年C組 村田 知瞭

5泊6日は少し長いなあと、芸術げき場の前でバスを待ちながら少しドキドキしていました。でも、あぶらむの里につくころには、そんな事はすっかり忘れていました。しおりにのっていた写真より草がぼうぼうとのびて、少しイメージのちがうあぶらむの宿で、初めて大郷先生とスタッフの方々、犬のプブに会いました。諸魂庵に荷物を入れて水着に着がえ、あぶらむ流のごあいさつをしました。自己紹介するとバケツの水をかけられるというすごいごあいさつです。バケツの中の水は山の水なので、とても冷たかったです。

ヨットの中で、大郷先生が名前を覚えるために、みんなに面白いあだ名をつけました。ほくの番が来て名前を言ったら、「村田製作所だな。」と言ってからほくは村田製作所と呼ばれるようになりました。その夜はヨットに泊まりました。ヨットはずっと少しゆれていていなしなと思いました。

ほくは、あぶらむの里で美味しい物を沢山食べる事が出来ました。一番気に入ったのは、ドラム缶チキンです。大郷先生が、何でも焼くときには強火の遠火が美味しくなるコツだと言っていました。ドラム缶は上が丸く盛り上がっているのので、油が周囲にたまって、必要な時にそこから使えるから良いそうです。強火の遠火で焼いたチキンは本当に美味しかったです。野外調理の時には、ジャガイモ掘りで掘ったジャガイモや玉ねぎを、ぬらした新聞紙で包み、その上にアルミホイルをまいて火の中に入れました。するとホクホクに出来上がって美味しかったです。カレーの野菜を切ったり、なべ洗いにボール洗いといそがしかったけれども美味しいカレーが出来たと思います。それから、石がまだ焼いた手作りピザは、生地を出来るだけうすくのばすのがコツだそうです。トマトソースの上にほくの好きなエビと木の子をトッピングしてチーズをのせました。焼き上がったピザは、生地がふあっとしてチーズがトロトロで美味しかったです。それから、スタッフの方からの差し入れの桃の丸かじりが美味しかったです。

大郷先生が、小さい船と大きい船の話をしてくれました。あるゴールを目指す時、小さい船は浅い所を通れるので、沿岸の近道を通ってゴールに早く行けますが、大きい波にのまれたりする危険をとまいません。大きな船は安定性があるけれども、深くて広い所しか通れないので遠回りで行かなければなりません。どちらの人生が良いかわかりませんが、大郷先生は自由のある小船の人生を選んで沢山の人の助けられて、何も無い所から今のあぶらむの会を作ったそうです。小さい船と大きい船と人生には二種類ある事は分かりましたが、どちらを選んで行くかはまだ分かりません。ふ通の人生というのはどちらなのだろうと思いました。ほくは、今の所ふ通が良いと思います。

ナイトハイクがあんなにつらいなんて思いませんでした。休むとつらくなるという事があるとは初めて知りました。歩くのをやめて休みたいけれども休めないのです。なぜかという、休むとき筋肉が固まってしまう、また歩き出してほぐれるまでいたくなるのだそうです。ふくらはぎがばんばんになった時も、前田先生は太ももを高く上げて歩いてごらんと教えてくれたのでやってみたら、本当にいたくなくておどろきました。ほくがナイトハイクで一番してみたかった、道路にねころがって星を見るという事も出来ました。北斗七星が良く

見えました。最初、かい中電灯をつけなくて歩き始めました。不思議な事に、真っ暗な中でもよく目が見えました。ほくは、みんなのパンをリュックに入れて運びました。大郷先生がナイトハイク用に焼いて下さったパンです。宿に帰って飲んだキンキンに冷えたポカリスウェットの美味しさは忘れられません。でも、その後急に寒くなって歯ががたがたし始めました。すぐにお風呂で温まる事が出来て幸せだと思いました。

あぶらむ流チェーンソウのあつかい方や燃料についての大郷先生の話も面白かったです。チェーンソウの燃料はガソリンです。灯油と軽油は温めないといけないけれども、ガソリンはすぐに火がつきます。ペローダは軽油で動きますが、軽油で動く物は灯油でも動くそうです。でも、税金の関係で利用出来ないそうです。チェーンソウのエンジンをかけるためにひもを引っばる時、ふ通は下に置いて、下から上へ引っばりますが、あぶらむ流は、歯をいためないように空中で左手を下に下げて右手で引っばるそうです。

あぶらむの里では、楽しい事が他にも沢山ありました。ペローダに乗った事。それから、滝つぼ飛び込み。最初ほくはやらないつもりでしたが、みんながこわくないからやってみたらと言うので挑戦したら面白くて、高さのちがう2ヶ所から飛び込んで遊んだ事。ツリーハウスにね袋でねた事。朝市での買い物時には、赤かぶづけを買ったら、ずっしりと重い真っ赤なトマトを3つももらってしまいました。家で食べたならこれとても美味しかったです。

最後に、ほくはナイトハイクがしくて飛騨高山コースを選びました。ほくににとって、ナイトハイクは今までで一番つらかったと言える位大変でした。でも、ナイトハイクをして本当に良かったと思っています。つらかったからいやだったかと言うと、そうではなくて、やって良かったと思っていますからです。この感覚はとても不思議な物です。多分感謝なのだと思います。ナイトハイクをやりとげられた事はほくの宝物の一つになりました。



毎年恒例の滝飛び込み。子どもはこうでなくては。

「あぶらむの里」というこの場を、人と人や国と国、そして文化などの「交差点」としての役割を担いたいと、これまで多くのコンサートや講演会を企画してきた。

今年も、分不相応とは知りつつも、成り行き上4つのコンサートを催すこととなった。情宣や集客に難点のあるあぶらむ、出演者に失礼のないようにと人集めに努力はしてみたものの、十分な聴衆とはならなかった。しかし、「怪我の功名」というか、50人~70人の小規模の方が家族的雰囲気の良い内容となった。ご協力いただいた方々に心より感謝、お礼申しあげたい。本年は日仏修交150周年記念の年。親善友好大使を迎えてのコンサートを、会員の朝比奈先生が報告して下さいました。

### 「トランペットから聞こえてきたもの」

立教大学名誉教授 朝比奈 誼

11月1日、諸魂庵でトランペットを聴いた。東京芸大の杉木さん以来のことだが、大郷さんによればあの演奏はもう4年も前になるとか。あの時は親子3人の共演（息子さんの一人から、打ち上げの宴席で、芸大でよくフランス語を習ったと打ち明けられてビックリ）だったが、今度はフランス人男性2名の吹き手と日本女性のピアノのトリオ。日仏交流150周年を記念する行事の一環として、飛騨を皮きりに日本各地をまわるという。フランス人がなぜ奥飛騨までやってきたかの？ 桜道マラソンを主催する大郷さんのことだから、ランナーを迎えた経験は過去に何度もあろうが、今度はトランペッターだ。聞けば杉木さんの紹介だという。なるほど、富山商業吹奏楽部の縁なのだ。それが年月を経て、はるばるフランスから楽人を招き寄せ、彼らの吹くトランペットの響きが「あぶらむ」の里に轟いたということなのだ。りょうりょうたる吹奏を聴きながら、人と人との結びつきがこうやって交わりの輪をひろげていくことの有難さをしみじみ思った。「有難さ」というのは、そういう機会を設けてくれた大郷さんとそのスタッフへの感謝を意味するが、滅多にないことという意味もある。そう、飛騨の山奥の話なのだから。そこを千古不易の風とともに、西洋の楽器の音がわたって行く、これは大変な事件ではないか。30年以上も昔、パリの劇場で文楽を見たことがあった。物珍しさから満員になったのはいいが、なにぶん同胞のほくでも理解が行き届かぬ浄瑠璃のことゆえ、同行のフランス人への説明に苦労したものだ。文化交流という掛声はきれいでも、実をあげるのは容易でない。ただし、その後、日仏の距離は確実に縮まった。それに、日本からの一方通行の時代から、相互交流の時代に移り、近頃は一部の日本通だけでなく、並みのフランス人までが旅行に来て、それも京都・奈良見物だけに終わらないケースも増えてきたと聞く。そんな今も飛騨でフランス人のトランペットを聴くことは「在りがたい出来事」に変わりないのだが、諸魂庵のコンサートで痛感したのは、フランス人の態度の変化、つまり、訪ねてくる側が彼我の隔たりを埋めようと、それなりに努力するようになったことだ。リーダーのニコラ・バロニエさんはリヨンの音楽院でトランペットを教えているという

が、仙台のアリانس・フランセーズ（フランス政府運営のフランス語教育機関）で4年間院長を務めたという経歴を持つ。日本語が達者だし、日本の事情にも通じている。そこで、会場にどんな聴衆が待っているか予測し、策を凝らしたらしい。その結果、楽器演奏だけでなく、自国紹介のスライドを映写し、解説するという気の配りようを見せた。しかも、嘗ての院長時代の秘書だった女性（今は東京のフランス大使館領事部に勤務）が彼の説明を逐一通訳した。ぼくが学生の頃に会ったフランス人のようなお高くとまった姿勢は影をひそめてしまったといえる。（昔ならこちらが通訳を用意するのが当然だった！）

面白いのはスライドの選び方。「皆さんがイメージするのは違うフランスを紹介する」と断ったうえで、プロヴァンスやブルターニュ、ブルゴーニュやオーヴェルニュというふう

に、もっぱら田舎の風景を映したのだ。それも、いわゆる観光名所を避けながら、ブドー畑や塩田で働く素朴で健康的な農夫、豊かな笑いを湛えた老婆を映してみせた。彼らの意図は、フランスというと、パリであり、シャン・ゼリゼであり、モードの国だという日本人の固定観念を打ち破ることだった。その上で、農業国としての伝統を今も保持し、美しい自然が残っていることをアピールしたかったのにちがいない。因みに、このスライドは打ち上げの宴席でも好評で、デンマーク旅行を計画していた某さんなど、行先をさっそくフランスの田舎に変更するつもりだという始末だった。

それに、トランペットの華やかな音色はフランスの明るくて広々とした景観にピッタリ合う。聴衆は思わず心を開いて、トリオが奏でる音楽の世界にずんずん誘いこまれていく。演奏者との距離が近づき、ゼロになった。「あぶらむ」はそろそろ冷えこみが来て、早くもストーヴが活躍をはじめていたのだが、拍手喝采のなかで諸魂庵の空気が熱くなったのは、薪の火のせいではなかった。とうとう大郷さんがトランペットを吹きだすまでになった。庵主が高らかにメロディを吹くと、バロニエさんがリズムカルなスイングでそれを追いかけて、一同、陶然となった。そうすると、高橋竹山の三味線が巻き起こした興奮と少しも変わらない。たしかに、音楽に国境はない。それが実感だった。

フランス語が話したくて、宴会の際にはぼくはバロニエさんの隣に座らせてもらった。彼は「あぶらむの里」の環境が気に入ったと言ったが、それは外交辞令ではなかった。というのも、「日本に再度住む機会があったら、どこに住みたいか」という問いに彼は「むろん仙台」と答え、「適度なサイズの都市で、自然が近くにある」ことを理由にあげたからだ。要するに、彼も大郷さんと同じ「自然派」で、現にリヨン郊外の山中に静寂な城館を構えて暮らしている、そこは「ここよりも広くて大きいから」「お前がフランスに来たら、ぜひ泊まりにきてくれ」とまで言い出したからだ。

そもそもはトランペットを吹きに「あぶらむ」に来ただけだったはずだが、どうやらこの土地に泊まり、大郷さんと「共演」するうち、共鳴するところがよほど大きかったのではないか。ぼくもその「共鳴」の渦に巻き込まれてしまったわけだが、人と人との結びつきの大切さを「あぶらむ」はまたしてもぼくに教えてくれたのである。



築304年の諸魂庵で演奏する  
フランス親善大使「カミーシャ・トリオ」

「私とあぶらむ」

NPO法人 グロウイングアップ 代表 吉野 美智子

「<sup>さとわ</sup>里<sup>はかげ</sup>曲の<sup>こみち</sup>火影も～<sup>かみち</sup>森の色も～<sup>かみち</sup>田中の<sup>かみち</sup>小路をたどる人も<sup>かみち</sup>蛙のなく音も鐘の音もさながら<sup>かみち</sup>震める<sup>かみち</sup>朧月夜」。TVCMから流れる懐かしい童謡を聴きながら、あの風景を思い出して書いています。ちなみにこの歌詞は（朧月夜）の二番で、一番は「菜の花畠に日薄れ見わたす山の端、霞ふかし 春風そよふく空をみれば 夕月かかりいてにはい深し～」どうですか？、訪れた事のある人は「そう！そう！」、まだの人は「行ってみたいっ！」と思われませんか。振り返れば今を遡る事数十年前あぶらむが多分誕生した時から、私の心のすみに小さな火種となって入り込んでいたと思われます。ですがその火種は大きくなる事もなく、心の中でぼ～と蛍のように光を放っていたのが、突然大きな炎となったのが2006年の秋になりましたよ。あぶらむ主催の「厳冬期のアラスカの旅」の話が急に浮上し、実現可能の話し合いに是非参加せよとの、誰とは言えない無言の（笑）圧力に屈し、はからずも数十年来ぶりのあぶらむデビューとあいなりました。でもまだその時は火は小さくチョロチョロとだったのですが、晩秋の里の風景はあまりにも懐かしく、あの故郷画家原田泰治の世界がそこに広がっていた事に驚くと同時に、今まで「あぶらむ」と言う言葉を耳にするたび思い描いていた印象とはまったく違っていたのでした。ではどのように想っていたのか、クリスチャン系である事、突然この地に子供達含む家族で住み、山を切り開き自給自足の生活をする少し変わっている人達がすんでいるところ（すみません）という思いでした。一度気に入れば我行かん～、私の快進撃の始まり～始まりです。次の出会いは韓国からのお客様でした。いきなりの国際交流ですが、ま～私の韓国デビューは20年以上前でしたのでなんなく乗り越え（うそ～！）、その時の勢いそのままアラスカの旅に乗ってしまいました。何度となく重ねて来た海外旅行に比べてさすがとても印象深いものだったのは、あぶらむ通信でもおわかりの事と思います。特に私は右手首捻挫のおまけつきでしたので、私にとって2回目のアラスカのオーロラはそれはそれは素晴らしいものであった事はご承知の事と思いますが、あらためて申し添えておきます。

このあと「さくら道国際ネーチャラン」参加の外国の方達との出会いあり、沖縄の子供との雪まみれやら、いつか忘れていた子供の頃の感覚を思い起こさせ、あの自然の中では気負う事もなく、肩に力を入れずに素顔の自分をごく自然にさらけ出せる場所でもありました。こんなに自然体で過ごせて、大口を開けて笑い、涙を出せる場所はいままであったらどうか、又、自分はそんな場所をこの年まで手に入れていたのだろうかと考えてしまいました。思い返



熱演中の歌之助さん。2009年も来ますのでどうぞよろしく！

せばただ都会のコンクリートジャングルの中で大きく息を吸う事さえ忘れ、小さく生きてきた事を実感させられたのも事実です。

あの場所の素晴らしさを語るとき外せないのはやはり人でしょう。もちろんあのご夫妻です。こころ癒され安らげる処はやはりそこに住まう人の力である事は永きに渡り続けて来られている事で実証されておりますが、その事を継続し続ける事がどれだけ大変な事であり、日々の過ごし方を大切にされて来られた結果であろうと推察されますが、会話の中にその事があまり出てなくて、苦勞の染み付かない日々の過ごし方をして来られたのだと思わせて頂いたのは私だけではないでしょう。

又、食物全般においても、愛情たっぷりのものを提供して頂く、心癒される風景、温かい愛情一杯の人達、愛一杯の美味しい食事、いつまでも残して置きたい日本の原風景です。あの風景の四季すべてを味わいつくしたいとあのあと、雪のあぶらむ、花のあぶらむ、若葉のあぶらむ、こいのぼりの泳ぐあぶらむ、など春夏秋冬を愛しみながら味わってます。今年の夏の終わりにひよんな企画から生まれた、「そばと落語の会」を実現出来た事は、私にとって一歩進んだ関わりかただったと思えました。これからは少しでも手助け出来る関わり方をさせてもらえれば幸いです。迷惑にならない程度にですが～。

そして沢山の人達との出会いをさせて下さい。終わりに、それぞれの人はこのような場所をきっと持つておられる事でしょう。私にとって具現化した場所に出会えた事と、その機会を与えて下さった菅原美穂子氏に感謝致します。

ああ～聞こえて来ませんか？「静かな～静かな里の秋お背戸に木の実落ちる～夜はああ～母さんとただ二人栗の実煮てますいろり端～」、ほら！ことり木の実の落ちる音聞こえたでしょう～。

## 寄稿Ⅱ

### カラコルム

時々あぶらむに美味しいパンが登場する。さくら道250kmウルトラ・マラソンにやってきたヨーロッパのランナー達が驚くほど、それは美味しいパンである。贈り主は今も頑固に自作の石窯で焼く「ル・コパン」の主、リングンさんである。（リングンさんは愛称で、本名はハヤシバルさんです。）このリングンさんの本当の顔はアルピニスト。一昨年カラコルムの五大氷河を探索、登破した。これは世界の8,000m級の山全てを登頂したのと同格の快挙であるといわれている。リングンさんがその中で目にしたのは…。英文による報告書を、会員の長谷川秀司さんが翻訳してくれた。その一部を抜粋してお届けします。

なお、余談ですが、リングンさんのお知り合いが津軽三味線二代目高橋竹山さん。そのおかげで竹山さんにはボランティア・ギャラであぶらむに来てもらっているという訳です。人と人との連なりというものは不思議なものです。2009年度も竹山さんのコンサートが催されますのでお出かけ下さい。

## カラコルム山脈氷河群のトラバース（横断）

— 高地戦争と地球温暖化の前線を通して —

文. 林原 隆二 訳. 長谷川 秀司

カラコルムの大氷河の地形は、とにかく壮大であり、互いにつながった様々な峠によって結びついているのである。次から次へと、時には迫り来る分水界を越えて、新地域に足を踏み入れることは実に心躍るものがある。それは、複雑な氷河地形におけるルート発見、必要な運搬のための複雑な補給体制の計画、とりわけ遙か遠くの高い山々に踏査することの偉大さが相まっているのである。周知の通り氷河の踏破は、山岳トレッキングの一種ではあるが、もはや探査ではないかも知れない。それにもかかわらず、強い興味を引くに十分冒険的であることがある。私の基本的な夢は、4大カラコルム氷河を、それぞれの氷河の源流近くの峠を越えて踏破することであった。実際は、2つの部分、すなわち、ヒスパーからピアフォまでと、バルトロからシアチェンまでに分かれていた。

カラコルム山脈のトラバースは、主にヒスパー、ピアフォ、バルトロ、シアチェン、バルトロ、ピアフォ、ヒスパー、ピアフォ、チョンゴ・ルンマ、中央リモのようなカラコルムの大氷河をトラバースすることからなる。この地域は、インドのシヨーク川の大湾曲からパミール高原に隣接する、ほぼインド・アフガニスタン国境上のチリンジ峠まで及んでいる。トラバースの際の最も困難なことのひとつに氷河が政情不安定の地域に位置しているという事実である。中央部は、中印国境紛争がくすぶっている。インドとパキстанは、シアチェン地域は有名な山岳戦争が続いており、西部では、アフガニスタンの混乱がある。私の遠征は、1975年から2006年まで7つの探査による横断を含み、移動距離は900キロ以上に及んだ。

### （カラコルム山脈及びカシミールについて）

カラコルム山脈は、中央アジアの南に位置し、ほとんどが乾燥地帯である。しかし、K2（標高8611m）に代表される高く風の強い山々は、斜面に沿って大気を上昇させ、雲や雪を発生させる。山々を覆う雪はゆっくりと氷河に形を変える。カラコルム山脈は、山岳氷河の中央であると言える。シアチェン氷河は、約72キロあり、世界でも最も長い氷河の一つである。他にも世界クラスの山岳氷河が存在するが、ほとんどの登山家は、単に最高地点に到達するためにそれらの氷河を通ってきた。

カラコルム山脈の登山を考える際、政治情勢が最初に対処すべき障害となるため、この地帯の現代史を理解しなければならない。カラコルム山脈は、パキスタン、中国、インドによって共有されている国境に位置している。カラコルム山脈の周辺地帯は、ほとんどがカシミール州である。英国のインド亜大陸からの撤退直後、パキスタンとインド両国の現代史の大半は断続的に続く戦争状態にある。

紛争の原因は、カシミールへの主権の主張及び関連する宗教問題である。戦争の象徴的な点の一つは、両国の戦闘が、カラコルム山脈の高地、特に公式にはどちらの国にも帰属しないシアチェン氷河周辺で行われたことである。カシミールのほとんどは、幾多の戦争の後、条約によりパキスタンとインドの間で公式に分割されている。領有が不明瞭であったこと

が、両国にこの地帯を事実上管理してしまおうと促せたのである。1984年両国がシアチェン氷河及びカラコルム山脈の各峠に軍隊を派遣した際、この氷河は、世界で最も高標高での戦場となったのである。多くの軍人が敵の攻撃ではなく、寒さと雪崩と高標高によって死亡したのである。

領土紛争は、印パ間のみならず、中印間でも生じた。マクマホンラインが英国領インドとチベットに沿った中印国境として見なされていたが、中国はこの国境線の正当性を認めなかった。1962年中国はインドに対して攻撃を仕掛け、勝利し、アクサイ・シン地帯の事実上の支配権を獲得した。

近年、当該3国は、停戦を維持しており、国境確定の問題は未解決であるものの、氷河地帯からの撤兵は可能な選択肢になってきた。

### (探査、戦争、そして氷河)

カラコルム山脈に魅了されて32年が経つ。1975年に、京都カラコルムクラブの隊員としてブリアン・サール山(標高6293メートル)に登頂した。その後、この地帯の山々と氷河群に感動し、探査を開始した。他の登山家から我々が異なるのは、大部分の登山隊がやってきたように、より高みへ登ろうと挑戦し続けるのではなく、むしろ、地域全体を探検すること、すなわち氷河群を旅することであったという点である。これは政府の役人からは十分理解されず、許可を出すには後ろ向きだった。無論、後ろ向きの別の理由には、前述したようにカラコルム山脈の情勢であった。

### (5大氷河の探査)

すべては、1970年代に日本・ヒンズークシ・カラコルム協会がカラコルム山脈の主要氷河を探査することを考えた時に始まった。協会が1977年にK2登山に成功した後、動植物等ヒマラヤの自然の写真撮影を考えていた写真家の水越武のような別の側面を促し始めた。我々は、1978年に許可申請を行ったが、却下された。翌年、パキスタン政府に対して探査の意義について根気強く懇請し、シア・カンリの登山探査として計画は認められた。探査は、スカルドゥから開始され、アランドウ、ヌシク・ラ、ヒスパー氷河、ピアフォ、バルトロ氷河、コンウエイ・サドル、シアチェン氷河上流、ピラフォンド氷河、スカルドゥを通り、その後ゴマを経由してスカルドゥに戻ってきた。探査の全行程は、搬送を含め500キロ以上はあったろう。

当初の計画では、フンザからシアチェン氷河までの旅程であったが、印パ緊張により、計画の変更を余儀なくされた。しかし、事実上の支配線が頻繁に変更されていた状況を考慮するならば、このことは想定内のことであった。幸運にも前線に行く許可を受け取ることができた。

技術的に困難な点は、ケロ・ルンマ氷河とヒスパー氷河の間に位置するヌシク・ラの峠越えと、バルトロ氷河とコンウエイ・サドルとシアチェン氷河の頂きにあるコンウエイ・サドルの峠越えであった。ヌシク・ラは、現地の人々が通う峠であったが、1979年、探検隊



のみが訪れる場所になっていた。氷河の衰退により、斜面が段々急になり、十分な装備なしでは人々はあきらめざるを得なかったのである。ロープ及びハーネスでも、通過は予想以上困難であった。コンウエイ・サドルを通過した際、バルトロ・カンリからの雪崩の危険があり、氷河の底辺部近くを通過することを回避する必要がある。

技術的に言うと、この探査は、2つの高標高の峠越えのキャラバン隊を編制することとなった。最初のヌシク・ラ峠は、上りの南面は緩やかな雪の斜面になっており、下りの北面は雪庇にさらされた険しい壁である。当初は、峠まで荷物を運搬するためにポーターを利用するつもりでいたが、途中で登山を拒否したため、ハイポーターの手を借りつつ自力輸送しなければならなかった。下りでは、危険な場所は荷物をロープで降ろした。成功できたのは、我々が軽装備の登山隊であり、そしてアスコレからヒスパー峠を越えピアフォ氷河まで荷物を運搬するサポート隊によって助けられたからにほかならない。

第2の峠は、コンウエイ・サドルであり、そこでシア・カンリを登るためのCIを設営した。しかしながら、雪崩に襲われたコンドゥス氷河が待っており、反対斜面を降りることができなかった。コンドゥス峡谷に入る代わりに、一つ登頂を成功させた後、中腹部の深い雪面をC2（標高6430メートル）からシアチェン溪谷の中へと横断を開始した。長い水平のトラバースと深雪の中のラッセルの後、アイス・ブロック帯を下りたところ、シア・ラの下で雪に覆われたクレバス帯に捕まってしまった。3日間苦闘し、この知られざる地帯を通過して、シアチェン氷河の底までたどり着き、待っていたのは、まるで高速道路のような裸氷を容易に歩けることであった。

### (1997年のヒスパー氷河探査)

私の次の探査は、1997年のヒスパー氷河の征服であった。許可が下りずに未踏破のままであった。この探査では、我々はスカルドゥからスタートし、アスコレ、ピアフォ氷河、ヒスパー氷河を経由してフンザで終わった。21日間の遠征であった。

今回の探査で衝撃を受けたのは、氷河の後退であった。1979年の探査でヒスパー氷河から越えたヌシク・ラを見上げると、かつてその峠から下りてきた氷壁は黒い岩面と化していた。これほど信じられない速さで氷河の後退が生じているとは本当に驚くべきことであった。水平状のモレインと氷河の間隔は、非常に広がっており、その結果支流の氷河がヒスパー氷河に合流する度にモレインと氷河の間を上り下りしなければならなかった。水平状のモレインを通過することは、1979年よりもずっと難しくなっていた。こうした間隔の変化は、上方からは容易には判然できなかったが、現場を歩くことが、何が生じているかを直接物語らせるのであった。氷河の量的減少が、間隔の変化に対応しているならば、それは巨大な量にあたる。氷河の後退を考える際、厚さの減少を考慮にいれなければならないことは明らかだった。また、多くのクレーターのような水溜まりを気づき、それは氷が実際に解けていることを示すものであった。わずか18年という短期間で氷河の様相が劇的に変化した事実に驚いたのである。

### 〔2002年日印東カラコルム探査〕

カラコルム山脈への他の探査との顕著な違いは、他の探査がパキスタン政府から許可されたものだったのに対して、今回はインド政府から許可を得たものだった点である。1979年パキスタン側からシアチェン氷河上流を旅したが、今回はインド側から下流部を踏破した。今回は、いくつかの達成があった。カラコルム峠に達し、初めてテラム・シエール台地に踏み入れ、パドナマス山（標高7030メートル）に初登頂し、シアチェン氷河をトラバースした。この探検が、日印の国際隊によって編成されたことも注目すべきであろう。9月11日テロ以降、国際情勢が厳しくなっていたので、インド側の協力なくしては当初の計画の達成は実現できなかったろう。

### 〔2006年バツラ氷河及びチリンジ峠の探査〕

私にとって最後の遠征となった場所は、カラコルム山脈西北にあるバツラ氷河及びチリンジ峠である。チリンジの向こう側は、アフガニスタンのワクハン回廊であり、その周辺にはアル・カイダが潜伏しているという情報があった。実際には我々は、深刻な問題に直面することなく、峠に達することができた。バツラ氷河はそれほど急勾配ではなく、目標地点には容易に到達することができた。水平状のモレインの上り下りは少々困難であったものの、今日、氷河の後退について考えると、数十年前ならばもっと容易に旅することができただろう。

今回の探査中感じたことは、人間と自然の生存力であった。我々はしばしば、高標高の場所で、人々が日常生活を営み、ヤギ、羊、ロバ、ヤクを放牧しているのを目撃した。こうした地帯は、超高標高の戦場よりは随分低いものの、そこで彼等は生まれ、死んでいくのである。彼等と比べると私は、カラコルム山脈を最初にトラバースした者ではなく、単に通過しただけの旅人であったに過ぎない。

### 〔要約と謝辞〕

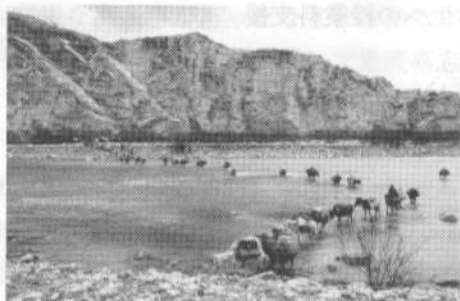
30年以上にわたり、カラコルム山脈大氷河群のトラバースにおいて良き友人達と共にし、その結果、私のトラバースの夢は何とか実現することができた。ひたすらに、探査で助けてくれたガイド、ポーター、そして友人達の支援のおかげである。彼等にはいくら感謝しても仕切れない。

各探査を通じて経験したことは、私の宝である。それは、氷河遠征の忘れがたき思い出のみならず、平和の大切さと環境の保護の実現でもある。

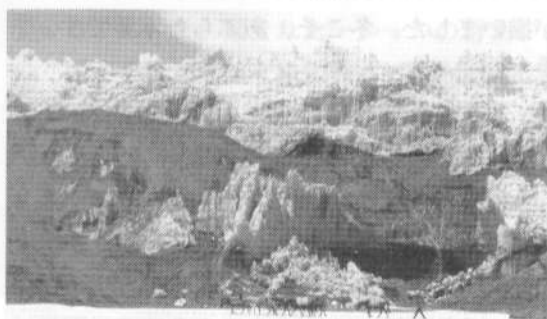
### 私のカラコルム山脈遠征の記録

- 1975年 ブリアン・サール：京都カラコルムクラブ
- 7月19日－8月19日 8月7、8日隊員7名が登頂
- 1976年 K2日本踏査隊
- 6月27日－8月24日、8月7日最高点7150m到達
- 1977年 K2：K2日本踏査隊

6月2日-8月下旬 8月8, 9日隊員8名が登頂  
 1979年 5大氷河群及びシア・カンリ：京都カラコルムクラブ  
 5月21日-8月21日 7月30日隊員6名がシア・カンリの登頂、  
 8月4日隊員2名がバルトロ・カンリⅢ、Ⅳに登頂  
 1997年 ヒスパー氷河：京都カラコルムクラブ  
 6月17日-7月6日、7月1日ヒスパー氷河到達  
 2002年 東カラコルム及びパドマナブ：日印東カラコルム探査隊  
 5月15日-7月3日、5月28日カラコルム峠、隊員2名6月25日パドマナブ登頂  
 2006年 バツラ氷河及びチリンジ峠：ラ・コパン・アルペン隊  
 6月20日-7月8日 6月24日バツラ氷河目的地到達、7月7日チリンジ峠到達



5月18日、一列になって渡渉する馬やロバの群。インダス川の上流のシャイヨーク川を北上する。



5月30日、中央リモ氷河舌端を進むキャラバン。荒々しい氷河の氷が剥き出しの壁が見える。



氷河末端部は異様な景観の水塔群がある。



コル・イタリアを通過しパドマナブ峰へ向かう

写真は、日印合同 東カラコルム踏査・パドマナブ登山隊 2002 より

# あんなこと そしてこんなこと

## あんなこと (2008年の主な報告事項)

### ●あぶらむガヴィス基金

本年度の支援先

・「コーディネラ・グリーン・ネットワーク」

代表 反町真理子 (フィリピン) 継続

活動内容 カリンガ州立大学に学ぶ5名の学生への授業料支援

・草の根NGO「アジア子どもの夢」

代表 川渕 映子 (富山県) 新規

活動内容 ベトナム戦争枯葉剤被害児自立支援

・NPO法人「ちいろば会」

代表 石垣 春美 (沖縄県) 新規

活動内容 障害者自立支援

●豊富な薪を利用した、足湯、岩盤浴、サウナ小屋そして待望の堀りゴタツ、冬期野外活動の拠点インディアン・ティピーと自作の数々が揃いました。冬こそ、あぶらむ本番です。

## こんなこと (2009年の主な行事予定)

### ●2009年あぶらむコンサート

・津軽三味線二代目高橋竹山コンサート 5月30日 (土)

・上方落語 桂歌之助落語会 8月29日 (土)

・UENO アンデスの風コンサート 10月10日 (土)

以上、全て開催日決定です。お出かけ下さい。

### ●あぶらむ雪祭り (冬期自然学校兼ねる)

1月17日～2月22日までの土曜、日曜、祭日に行います。連絡の上、ご都合のよい日にお出かけ下さい。

### ●あぶらむ夏期自然学校

8月3日～9日 (予定)

※尚、隔年予定としていた「ネパールの旅」、旅行代金高騰のため、未だ実施決定には至っていません。代替キャンプとして、タイ国か沖縄か、決定次第またご案内させていただきます。

## 2008年 あぶらむこの一年

- 1月・新年早々屋根の雪おろし
  - ・冬の野外活動拠点、インディアン・ティピーをつくる
  - ・日本カモシカの親子出現
- 2月・沖縄からの「雪遊び訪問団」。名古屋も大雪となり、空港からあぶらむまで10時間かかる。
  - ・第1回あぶらむアンバサダー会議（東京にて）
- 3月・今年も春を迎えることの喜び「春一番の会」
  - ・第1回沖縄渡嘉敷島キャンプ（3月27日～4月2日 参加者29名）
  - ・JA岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
  - ・あぶらむに連なる全ての子どもたちの健康を祈って「鯉のぼり上げ式」
  - ・第15回さくら道国際ネーチャラン（名古屋～金沢250km）参加者96名
  - ・ナザレ修女会出前ソバ打ち出張
- 5月・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
  - ・アーネル・バナサン「風の音コンサート」
  - ・田植（20日）
  - ・石臼初挽き
  - ・あぶらむ号リタイヤー、里に帰ってくる
- 6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
  - ・大郷、2年遅れの還暦休暇、北海道バイクの旅（北海道キャンプの下見兼ねる）
- 7月・沖縄訪問
  - ・岐阜「生と死を考える会」研修会
  - ・スズメバチに刺される、今年はハチ多かった。
  - ・立教小学校「自然の中でおもいっきりキャンプ」参加者16名
- 8月・あぶらむ夏自然学校（6泊7日 参加者27名）
  - ・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿
  - ・桂歌之助落語会
  - ・薪小屋完成
- 9月・沖縄訪問
  - ・岐阜「少年友の会」あぶらむ研修
  - ・小馬崎達也ギター演奏会
  - ・稲刈り（23日）平年並み
  - ・足湯、岩盤浴完成
- 10月・脱穀完了（もみで約1,000kg）
  - ・ウエノ アンドエスの風コンサート
- 11月・逝去者記念式
  - ・日仏修交150周年記念コンサート
  - ・「海と山との出会い」、富山「寿司栄」坂本吉弘さんと共に
  - ・味噌用大豆、白菜、大根等冬用野菜収穫
  - ・念願の「掘りゴタツ」完成
  - ・19日初雪（けっこうな積雪となる）
- 12月・沖縄及び南タイのモスレムの集落に活動するNGOを訪問
  - ・越冬準備
  - ・あぶらむ通信発送
  - ・クリスマス会

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

|||||||寄付者一覧('07年11月26日~'08年12月3日)||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

杉崎正和／豊見城聖マルコ保育園／東京聖テモテ教会奉仕会／江田宜子／菅原美穂子／祈りの家教会／山崎俊樹／松戸聖パウロ教会出張バザー／味岡努・敏江／伊藤文雄／矢崎ふき子／矢後和彦・正子／中野えり子／江見淑子／ジーン・レーマン／光安啓明／浜中好美／村岡明／岩崎静子／平岡眞／佃寿子／野崎久子／下堂前英一／市川聖マリヤ教会／谷市三／南知子／保坂正三／大塚梅子／北山和民／岡田賛三／鈴木武次／俵里英子／古川秀昭・昭子／森田トミ／藤田宏之／島田信弥／日野忠一・静子／森紀旦・敦子／金城盛弘／長谷川牧子／清水靖夫／佐藤明子／塩田純子／近藤真紀／長谷幸雄／松井明子／高畑謡子／宮古聖ヤコブ教会／竹田純郎／根本四郎・陽子／杵山博／本田リン／三沢悠子／渡辺洋一／田中洋子／畑井正春／外村民彦／加納美津子／財満研三郎・由美子／日根野慶一／吉川恵子／中島淳／太田亟慈／笹部昭博／長谷川秀司／静岡聖ペテロ教会／高瀬留美／須間栄津子／溝際庸介／福岡女学院中学校高等学校宗教部／越田信／一柳百／宮崎誠也／千葉復活教会／(株)アリミノ田尾兵二／池崎純一／上田敏明／山岸勇一郎・悦子／笹岡節夫／常見幸代／松尾正枝／横浜聖クリストファー教会／安藤実・陽子／串間千秋／梶原恵理子／星野直子／佐藤敏子／上田憲明・亜樹子／小野田恵子／鬼本博文／西垣正子／鶴川雅行／青山理恵／三原エイ／日本聖公会京都教区婦人会／谷章子／宮城正男・正子／坂本吉弘／ナザレ修女会会友会／森井謙介・松代／成田久夫／畑野栄一・寿子／小嶋泰子／芦屋聖マルコ教会教会学校／野田修助／坂尾新一／久田広子／相川喜久枝／新家恵子／岐阜少年友の会／西間木美恵子／島袋洋子／直井雅子／中島努／土師晴子／大槻カズ子／前田晃伸・容子／セントポールライオンズクラブ／又吉亀次

|||||||新規会員('07年11月26日~'08年12月3日)||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

高畑謡子／青山理恵／小嶋泰子／高山美江子／櫻井智則／瀬木貞子／山本眞／高野香江／宮脇加代子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。